2017年8月28日(月)　山陽新聞 [第2全県]

語る 伝える

岡山子どもの貧困対策ネットワーク会議代表・川崎医療福祉大講師　直島克樹氏（36）＝岡山市北区

なおしま・かつき　城東高卒、関西学院大大学院修了。2004年に社会福祉士となり、13年4月から川崎医療福祉大講師。専門は社会福祉学。

生活良くならないと子は絶望。夢を大人が支えるため議論を。

岡山子どもの貧困対策ネットワーク会議は県内の社会福祉士や弁護士、NPO法人職員らで昨春発足した。最大の目的は全ての子どもたちを支える社会づくりだ。日本はこの25年間で共働き世帯が増えた一方、1世帯当たりの平均所得は下がった。夫婦のうち1人でも働けなくなると生活が破綻する「リスク社会」になったと認識しなくてはならない。

日本の子どもの貧困率は13・9％で7人に1人とされ、ユニセフ（国連児童基金）の調査結果によると、中間層と下位層の所得格差は「貧困大国」といわれる米国より悪かった。特に問題なのは、見た目では分かりにくい子どもたちの貧困だ。よく話を聞くと、家のガスが止まっていて1日1食しか食べていないような子がいる。

県内でも困っている子どもたちに何かできるのでは―との思いが子ども食堂という形になり、大人たちに新しいつながりができてきた。子ども食堂はご飯に限らず、遊びや学習、体験の場としても機能している。

私は学生とともに民家を借り、子どもの夜間の居場所づくりに取り組んできた。夜の子どもの独りぼっちをなくすのが目的で、学校とも連携して子どもの情報を交換している。

利用する子どものほとんどは、ひとり親の家庭だ。中には親に障害があり、借金を抱えた上に受け取るべき養育費が滞っている家庭もある。親族がいても頼れない家庭が多いと感じている。

タブレット端末を持ちながら「家のお湯が出ない」と言う子どもに地域の人たちは驚く。ただ、その背景には、ひとり親家庭に対する児童扶養手当が4カ月に1回の支給で、家計管理が苦手な親はお金をまとめて使ってしまうといった事情もある。

夜間の居場所を利用する子どもたちは野菜を食べるようになり、学生たちに甘える経験を通じて成長している。その子の育ちのやり直しが何回もきく形を、地域社会で保障することに役立てている気がする。

親も何かに困っていることが多い。必要な人にサポートが届いていない今の仕組みが問題だ。行政の縦割りや担当者の頻繁な交代は関係を築きにくくし、親は支援制度を次第に利用しなくなる。

親が頑張っても、生活が良くならないと子どもは絶望し、夢を持たなくなる。

記者の一言

直島氏が指摘する通り、子どもの貧困は周囲が把握しづらい現状がある。対策を社会全体で講じる機運を醸成するには高いハードルがあるといえそうだ。「子どもたちの夢」を支える責任は大人にあるとも、直島氏は強調した。自分に何ができるかを考え、具体的な行動につなげていく必要性を再認識した。（山内悠記子）

夢を大人が支えていくための責任ある議論が必要だ。社会が「あなたの存在を大切にしている」と子どもたちに伝えることが大事と思う。さまざまな職業の団体が連携することで直接的支援が良くなり、社会の機運が生まれ、制度も変わる。

県青年司法書士協議会が11日、岡山市内で開いた講演会で話した内容の要旨。

「語る　伝える」では、心に残る講演の要旨を、記者の思いとともに紹介します。（随時掲載）